岡夫詩における叙事性（上）[1]

内　藤　忠　和

1. はじめに

1.1　岡夫について（1907-1998）[2]

岡夫、本名は王玉堂。岡夫というペンネームは、詩歌を武器に持ち場を守る兵士たることを自らに求めて当初“崗夫”と名乗り、次いで頭上にのしかかる山を取り去って“岡夫”に改めたという。1907 年 1 月 4 日山西省武郷県故城鎮に生まれた。幼少期、父たちの教育のもと古詩文を学び、1919 年秋、公費負担で山西外国文言学校に入学した。在学中は“五四”時期及び西欧，ソビエトロシアの文学から影響を受け、詩歌の創作を開始している。1926 年に卒業すると、太原兵工廠でドイツ語研修生となり、翌年同級生と『晋陽日報』紙上で文学副刊『Sturm und Drang』及び週刊『白光』等を創刊した。

1930 年に北京に行き、『民言日報』で仕事を始める。1932 年には北京左聯に参加し、革命運動に身を投じたが、同年 12 月に国民党当局に逮捕され、北京草嵐子監獄に収監された。1933 年、獄中で中国共産党に加入し、1936 年秋冬、共産党北方局の救援活動の末、薄一波ら 50 人余りと共に出獄し、太原に戻って抗日宣伝活動に従事した。

1937 年、太原が陥落してからは、晋東南地区に移って抗戦動員と文化教育活動に参加し、前後して中共武郷県臨時工委員書記，山西第 3 専区民革中学政治主任，晋東南文教界抗日救国総会理事，『抗戦生活』編集委員，『魯芸校刊』編集委員会主任，太行文聯副主任などの職を歴任した。この時期、「九月谷上场」，「人民大拥军」，「申海珠」などの長編詩を創作し、そのうち「申海珠」は晋冀魯豫辺区政府第一回文教作品詩歌部門甲等賞を受賞している。

中華人民共和国成立後は山西省文聯の成立準備に尽力し、省文協の主任に選ばれた。1951 年夏北京に異動となり、華北文聯の組織準備に加わった。1954 年には中国文聯に異動となり、連絡部部長，学習部部長，党組成員などの職に任じられた。この時期、詩集『战斗与歌唱』を出版したほか、王応慈，任桂林らと共著で映画脚本『虎穴追踪』を執筆している（1954 年長春映画製作廠により撮影）。

1966 年春に山西省文聯に異動となる。文化大革命が始まると“61 人叛徒集団”のメンバーとして陥れられ、批判闘争を受けた。1978 年党の 11 回三中全会の後、完全に名誉回復を果たし、その後は山西省第 4 回政協委員，第 5 回全人代常任委員，省文聯副主席，省作家協会副主席，省詩人協会名誉会長，省詩詞学会顧問などの職に任じられた。1985 年に『岡夫詩選』と長篇小説『草嵐風雨』を出版した。1989 年には詩文集『远踪近影』を出版し、1992 年には山西省委・省政府から“人民作家”の称号を授与されている。

1998 年 4 月 14 日午前 8 時に世を去る、享年 91 歳。翌年 3 月、生前自ら編纂した『楓林晩唱』が出版された。

岡夫は 1920 年代に高沐鴻とともに高長虹主宰の文芸社団狂飆社に参加して山西の近代文学草創期の担い手となり、30 年代には北平左聯のメンバーとなって革命運動に身を投じている。続く中華人民共和国建国後は趙樹理を筆頭とする文学流派“山薬蛋派”の一員として詩歌創作に励む一方、文芸部門の指導者として後進の育成に務めた。

1.2　先行研究

岡夫をめぐる研究は他の“山薬蛋派”の作家に比べてかなり少ないが、概ね以下の 2 つの系統に分類することができる；

ひとつは「岡夫早年的詩」(董大中)[3] に代表される初期作品の発掘を主眼としたものであり、もうひとつは「王玉堂同志生平」(省作家協会)[4] のような岡夫の生涯に注目した研究である。

近年出版された『岡夫的生平与創作』(楊占平)[5] は、岡夫の生涯に沿ってその詩作を紹介しており、現時点において最もまとまった成果であると言える。

また 1980 年代から本格化した“山薬蛋派”を対象とした研究においては、従来趙樹理，馬烽，西戎，胡正，孫謙，束為といった小説を主とする作家を対象として論じることが多く[6]、詩歌を主とする岡夫への言及は極端に少なかった。

1.3　本稿の目的

ここで本稿の目的について触れておきたい。

近年　論者は“山薬蛋派”の作家たち；趙樹理，馬烽，西戎，胡正，孫謙，束為の小説を対象にその物語構造を年代順に分析する作業を進めてきた。その結果、従来【山西省の農村を舞台とし、そこで発生した問題を題材としている】・【農村読者を意識して物語性を重視し、描写より叙述を重視する】という特徴

が指摘されてきた“山薬蛋派”の作品は、【西洋から受容した近代文学的作風から出発して“山薬蛋派”的作風を獲得し】⇒【“山薬蛋派”的作風が解体され西洋近代文学へ回帰する】という相似形の軌跡を描きつつ変化してきたことが明らかになった[7]。

本稿ではまず『岡夫文集』所収の詩歌 500 篇余りを対象に、年代順に自由律と定型詩、リアリズムとロマンチシズム、叙事と叙情といった基準を用いて分析を加え、その変遷の軌跡を記述していく。この作業を通じてこれまで国内では知られてこなかったこの詩人の詩と生涯を概観すると同時に、ほかの“山薬蛋派”作家に共通してきた変化の軌跡が岡夫にも見出せるかどうか検証していきたい。

2. 幼少期、青年期の岡夫（～1936 年）

2.1　幼少期の岡夫

本章では岡夫の幼少期から青年期にかけての生涯と詩作を紹介する。

岡夫の父王国禎は武郷県城で薬舗を営んでおり、辛亥革命が勃発するとこれを支持し、真っ先に辮髪を切るなど、開明的な知識人であった。また教育問題にも熱心であり、郷里で公立学校を開設し、ときには自ら学校に赴いて岡夫を教えることもあったと言う。こうした教育熱心な父の指導を受けて、岡夫は古典を主に学び、13 歳の時、県立第二高等小学校に合格した。しかし 1 年も経たないうちに家庭の経済状況の悪化から学業を続けることができなくなり、公費で学べる省都太原の山西外国文言学校に進学することとなった[8]。

2.2　山西外国文言学校時代と詩作の開始

2.2.1　山西文言学校時代

山西外国文言学校は、軍閥閻錫山が自身の政権に役立つ人材を育成することを目的として 1919 年に設置した外国語専門学校であり、岡夫はここで 14 歳から 19 歳までの多感な時期を過ごしている。閻は当初腹心の趙戴文[9] に教務長を任せており、英独仏の各クラスが、外国語，国語，算術の主要科目に加え、『論語』・『孟子』，歴史，地理，音楽，体育，技術，軍事教練を学ぶカリキュラムが組まれていた。半年後に閻は教務主任としてドイツ系アメリカ人の教育者ウエストハープ[10] を招聘して運営を担当させ、彼はカリキュラムから『論語』・『孟子』，軍事教練を排除し、外国語は文法重視から会話重視へ、国語は文言白話の併用へと改めるなど、大幅な改編を加えた。しかし、このことから閻錫山

との間に溝が生じ、1922 年の末には大幅に経費が削減されてしまう。結果、学生は 1 クラスに縮小し、多くの教員が離職したため、ウエストハープ自身が教壇に立つ機会が増えた。

岡夫はドイツ語クラスに在籍したが、シェイクスピア，ブレーク，ボードレール，ゲーテといった西欧文学の大家たちの作品を幅広く学び、在学中には太原にやってきた詩人タゴールの講演を耳にしている。また、ウエストハープは幻灯を利用してルネッサンス期前後の名画を学生に鑑賞させ、実習を通じて学生に労働の尊さを学ばせもした。さらに当時の中国で入手しうる最新の西洋科学の成果を紹介しており、自然科学ではリンネの植物学，ファーブルの昆虫学，社会科学ではサン・シモンおよびフーリエの空想社会主義からマルクス・エンゲルスの学説にも言及している[11]。

こうした環境下で岡夫の文学、とりわけ詩歌への関心が醸成されていった。岡夫自身の回想によれば、この時期彼が好んでいたのは李白，杜甫の詩や王昌齢の辺塞詩であり、五四新体詩では郭沫若，徐志摩の作品を好んでいたという[12]。

我々が現在目にすることができる最も早い時期の詩作は、1924 年のものであり、以後山西外国文言学校を卒業する 26 年までの 3 年間に 16 篇の作品を残している。この中には七言詩も 3 篇含まれているが、概ね五四文学の影響を受けた自由律のものが多くを占めている；

「神圣的怀抱」
夜呀，带来你的和平
睡眠呀,带来你的梦
娇妖地娇妖地穿过朦胧的树影
天上但见几点疏星
姗姗地姗姗地，你请来为我现形·
啊,在你神圣的怀抱中
我开始认识了
生命、爱情与光明

「神聖なる抱擁」
夜よ、貴女の平穏をもたらせ
眠りよ、貴女の夢をもたらせ
艶めかしく妖しく朦朧とした木々の影を抜けて
空にはまばらに星々が見えるのみ
ゆっくりとゆっくりと、私のために姿を現してくれ・・・・
ああ、あなたの神聖なる抱擁の中で
私ははじめて命と愛情と光を認識する
(1924 年ごろ)[13]

「生命」
生命跳动的浪头起涨到最高潮
尊严而欢乐的女神脚踏着一个
个浪头跑
我要随她飞飘我努力攀她的衣绦
去她只一趟却在昏迷的狂悦晕倒

仿佛心身都已融化在海滩
阳春与鸥鸟歌唱着快乐与平安
在这样的狂欢中不知有多少世纪
在这样的幸福中仿佛已过亿万斯
年

（1925 年ごろ）[14]

「生命」
生命の躍動の波が最高潮だ
尊厳にして歓喜の女神が波を踏んで
駆ける
私は彼女に従って飛ぼうと試み彼
女の衣のレースに縋り付く
だが彼女の素早さゆえに混迷の喜
びのうちに昏倒する

身も心も砂浜に融けこんだかのよ
うに
春とカモメは快楽と平安を詠う
この狂喜の中に幾世紀
この幸福の中で何億万年も過ぎた
かのようだ

「被雨」
被雨淋湿了-心，
睡着了。
在梦中犹自埋怨着；
不作美的雨呀，
岂不要湿了爱者的婚衣？

如被天乐唤醒；
醒后，
月儿洗过澡了。

「雨に打たれて」
雨に打たれて濡れてしまった - 心、
眠りについた。
夢の中で未だ恨みに思う：
意地悪な雨よ、
愛する人の婚礼の服が濡れてしまう
ではないか？

天に呼びさまされ：
目覚めた後、
月はシャワーを浴びた。
（1926 年）[15]

このように岡夫の最初期の習作は叙情的かつロマンティックなものが多く、“愛”や“生命”がキイワードとして頻出する。ここからは、中国の伝統的な詩文の素養をもつ少年が、初めて西洋の学術および詩歌に触れ、“愛”や“生命”といった普遍的なテーマに真っ向から取り組み、自身の言葉で詠い描こう

と奮闘する姿が窺える。

2.2.2　兵工廠時代

1926 年に山西外国文言学校を卒業した後、岡夫は閻錫山政権下の兵工廠に配属となり、研修のため、まず太原市内の銃器工場に住み込み、労働者と生活を共にした。研修が終わると兵工廠のドイツ人技師の通訳となったが、文学に疎い技師との交流は皆無であった上、兵工廠を管理する兵器管理委員会は形ばかりで何の指示もなかったため、岡夫たちは学生時代と同様、ドイツ語の学習と読書の日々を送るほかなかった。岡夫は自身の才能を生かすべく閻錫山に西洋の学術書の翻訳計画を持ちかけるが冷淡な反応しか得られず、そのエネルギーは文学活動へ向けられることとなった。

1927 年春になって、すでに上海で『狂飆』を主宰していた山西出身の高長虹，高沐鴻らに倣い、岡夫は友人たちと『晋陽日報』の文芸副刊『Sturm und Drang』[16] を立ち上げた。この創刊号に岡夫は「霊与肉」を発表しており、これが彼の事実上のデビュー作となる；

「灵与肉」-为《S·D》发刊号
灵与肉，
爱与敌，
外的压迫，
内的忧郁，
冰冷与火热，
晴空与霹雳，
生的欢乐，
死的壮烈，
时代的飞跃，
跳荡的旋律·
艺术家，
请尽力记录。

「霊と肉」―『S・D』創刊号によせて
霊と肉を、
愛と敵を、
外からの圧迫を、
内なる憂鬱を、
氷の冷たさと火の熱さ、
晴天と霹靂を、
生の喜びを、
死の壮烈を、
時代の超越を、
揺れ動く旋律を・・・・
芸術家よ、
力の限り記録してくれ。
（1927 年）[17]

生と死、愛といった従来向きあってきたテーマに加え、自身を取り巻く全てを記述してやろう、という岡夫自身の気概と、共にスタートラインに立った若き芸術家たちを鼓舞しようとする意図が感じられる。この作品を皮切りに、1930

年に北京に赴くまでの4年間、岡夫は29篇の作品を残しており、全て自由律の形式を採用している。

この時期の岡夫は高長虹や高沐鴻といった年長の文学者たちとの交流を深め、27年秋には高沐鴻の同窓生である任行健と『白光』を創刊するなど、旺盛な文学活動を展開する。また、任行健から『マルクス伝』の手ほどきを受け、革命思想に触れ始める。作品にも社会に目を向け、その現状に憤り、強烈な批判を浴びせたものが登場し始める；

p 29

「女妖之舞」

直至夜晚,
直至深深的夜晚,
天孙星已经哭了第三次,
你跛足的跳舞才疲乏了,
你肥肿笨丑的女妖呀!

没有留半点爱恋的纪念,
我们便如此匆匆分手,
难道你便不觉得羞惭,
当你明天要我陪你舞的时候?

我毫不能懂这种跳舞的意义,
我只烦困于旋律的迷乱;
我的热爱便也从喧扰声中嚷出了,
但是我啊,实在已忘了我自己。

而你安然地睡去做你的美梦了,

「女妖の舞」

夜になるまで
夜が更けるまで
織姫星はすでに3度も泣いていたが、
あなたのいびつな舞はやっと疲れが出てきた。
肥え太った愚かな女妖よ！

恋い慕う紀念をひとかけらも留めず、
私たちはあたふたと別れた、
あなたは恥じらいを覚えないのだろうか、
明日私とともに踊ろうという時にも？

私はこのダンスの意義を少しも理解できない、
私はただ乱れた旋律に困惑し、
私の熱愛は喧噪のなか声を上げた、
しかし私は、本当に私自身を忘れてしまった。

なのにあなたはぐっすりとあなたの美しい夢を見る、
愁いも焦りもなく、ただ楽しくなれるチャンスがやってくるのを待って—
私？私はあなたの夢を悲しみ、

没有忧虑,没有心焦,
只等待某个开心的机会的来到
—
我呢?我呵,我在痛心着你的梦,
而且哭泣我的明天!

自分の明日を泣くのだ！
（1928 年）[18]

1924 年の国共合作に始まり、北伐の成果によって成功間近に見えた中国国民革命は、1927 年の四一二反共クーデタにより一時頓挫してしまう。この失敗の責任は国共合作を破棄した国民党にある、と考えた岡夫は国民党を女妖怪に喩え、その醜悪な行為を罵っている。

また、同年、兵工廠が奉天軍閥の爆撃を受け、岡夫は爆発に巻き込まれた年若い労働者の惨たらしい姿を目撃する。その時の憤りを詩のかたちで表現したのが「世界と時代」（1928 年）である；

「世界与时代」
这是一个什么世界!
这是一个什么时代—
是一个砍杀的世界
是一个死灭的时代?
浪头起伏似的循环着
杀的惨剧与死的悲剧
啊啊,你残暴的血的饕餮者啊
你死神填不满的空腹
・・・・
你这个砍杀的世界啊
你自己何时会被砍杀呀?!
你这个死灭的时代啊
何时你自己会死灭呀?!

「世界と時代」

これはなんという世界なのか！
これはなんという時代なのか—
　斬殺の世界、
　死滅の時代なのか？
浪の起伏のように
殺害の惨劇と死の悲劇が繰り返される
ああ、暴虐なる血に飢えた獣よ
死神の何時までも満たされない空
腹・・・・

この斬殺の世界よ
おまえ自身はいつ斬殺されるのか？！
この死滅の時代よ
いつお前自身は死滅するのか？！

一方で夜を女神に見立て、創作の秘密を追及したいという欲望を詠った「夜」（1927 年）や、“生命”や“愛”といった岡夫が詩作を開始して以来追及し続けてきたテーマをロマンティックに詠い上げた「6 月の愛」（1928 年）のような

作品もまだ数多く存在している；

「夜」
夜。我赞美你,
伟大的女神。
万物都在你的怀抱。
创造之儿在你的腹中,
孕育、操动、诞生。
伟大的女神呀,
你永为深思者所钟爱。
光的花朵,
不过是你的装饰:
美丽仅爱情的媒介。
经过华彩之门,
进入神秘的内室,
在这里,
是无限和永久。

真理呀,
容我觐见你。
宣誓你,
我愿以至深之虔诚,
窥觇你的裸体。

「夜」
夜よ、私はあなたを賛美する、
偉大な女神よ。
万物すべてが貴女の抱擁のうちにある。
創造の児は貴女の胎内で
育まれ、動き、そして誕生する。
偉大な女神よ、
貴女は永遠に思考する者の寵愛を受ける。
光の花は、
あなたの飾りにすぎず：
美しさは愛情の媒介でしかない。
彩の門を経て、
神秘の寝室にはいる、
ここには
無限と永久がある。
真理よ、
どうか貴女に謁見させてくれ。
宣誓します、
私はこれ以上ない敬虔さで
貴女の裸体をのぞき見したい。
(1927 年)[19]

「六月的爱」
我被六月的爱火炙烧着,
同太阳一般疯狂。

从凌晨三点钟我们早起,
跑过了大海和原野,

「6 月の愛」
私は 6 月の愛の炎に焦がされて、
太陽のように狂う。

早朝 3 時から私は起き出し、
大海原と原野を駆け抜け、

驻足在天宇的中央。 *用镇定的眼睛我注视着,* *我看不见一个妙影;* *用焦灼的眼睛我搜寻着,* *空虚正和昨天一样。* *啊,当夕阳每天没落了行踪,* *赤血还把半个天宇染得通红,* *不认识的爱呀,* *你知不知道我的苦痛?!*	空の中央に立ち止まる。 冷静な眼差しで注目しても、 美しい姿を見つけられない； 焦りの眼差しで探しても、 むなしさは昨日と同じ。 ああ、夕日が毎日その航跡を消し、 血のような赤さが空の半ばを赤く染めても、 まだ見知らぬ愛よ、 あなたは私の苦痛を知らぬのか？ (1928 年)[20]

しかし、相次ぐ戦乱と閻錫山政権の腐敗に嫌気がさした岡夫は、新天地を求めるべく閻に直訴し、1930 年 5 月、当時山西軍閥が支配していた北京の新聞社である民言報館に異動となった。

2.3　北京での活動と北方左聯

2.3.1　北京へ

北京市内宣武門外の民言報館に移り住んだ岡夫は、編集部配属となり、毎晩原稿の編集に追われるようになる。後には文芸副刊の編集も任され、多くの進歩的文学青年と知り合った。このころの岡夫はルナチャルスキーの『芸術論』[21]やプレハーノフの著作にも触れ、ますますマルクス主義とロシア，ソ連文学に接近するようになる。この時期に書いたのが「我们是来了」であった；

「我们是来了」 *—盼红军北上而写* *你不已听见有声音* *在破晓的晴空高唱?* *它唱道:* *我们在来了,*	「我らは来た」 - 赤軍の北上を願って記す 君はまだ聞いていないか？声が払暁の 晴天に高らかに響くのを。 声は歌う： 我らは来ている、 我らは来ている！

我们在来了!

钢铁般响亮的笑声
震颤得空气都开了花,
开花的空气喘息而欢唱道:
我们就来了,
我们就来了!

你不已看见斧头镰刀的旗帜
在彩色的云影中挥动?
它挥动着而且欢唱道:
我们正来了,
我们正来了!
只要你不是吸血鬼,
你有什么害怕?
站过来和我们一起欢唱道:
我们都来了,
我们都来了!

从沸腾的大地的深处,
吹起行动的号角,
行动着而且欢唱道:
我们是来了,
我们是来了!

鋼鉄のようによく通る笑い声が
空気を震わせ花開く、
花開いた空気は息を喘がせながらも歌う：
我らはすぐ来る、
我らはすぐに来る！

君はまだ見ていないか？斧と鎌の旗印が彩り豊かな雲の中高らかに揺れ動くのを。
旗は揺れ動きながらも喜び歌う：
我らは今まさに来た、
我らは今まさに来たのだ！
君が吸血鬼でないなら
何を恐れることがあろう？
立ち上がり我らと共に喜び歌おう：
我らは皆来た、
我らは皆来たのだ！

煮えたぎる大地の奥底から、
行動しろとラッパが吹かれる、
行動し喜び歌おう：
我らは来たのだ、
我らはやってきたのだ！
（1930 年）[22]

本作は、紅軍の到来を待ち望む心情を情熱的に詠っているが、同時に新天地北京にやってきた岡夫自身の昂揚した感情も投影されている。また、同年に書かれた「時候到来的時候」においても；

「时候到来的时候」
时候到来的时候,兄弟!
让我们手携手,挺然地,
向敌人的阵营进攻!
正义拥护在我们后边;
因为我们是被压迫者!

勇猛地向敌人的阵营进攻!
胜利必在我们这边:
敌人的力量柔弱、涣散,
他们是怕长官的命令而战!
我们,则为我们的全阶级的福利而战!

「時がやってきたとき」
時がやってきたとき、兄弟よ！
手に手を携え、胸を張って
敵の陣営に攻め込もう！
正義の援護が我らの後ろにはある；
我らは被抑圧者なのだから！

勇猛に敵の陣営に攻め込もう！
勝利は必ず我らの側に：
敵の力は弱く、散漫だ、
彼らは長官の命令を恐れて戦い、
我々は、全階級の福利のために戦う！
（1930 年ごろ）[23]

“我ら”，“同志”，“被抑圧者”，“階級”といった革命思想の影響を色濃く感じ取ることのできるキイワードが続出しており、革命の勝利を願う気持ちがストレートに表現されている。形式的にはここで紹介した 2 篇同様、この時期に書かれた作品 9 篇全て自由律の形式を採用している。

このように 30 年代に入って、岡夫の詩作には、20 年代までの作品によく登場していた“生命”，“愛”，“創作の秘密”，“社会への憤りや批判”といったテーマに加えて“革命への夢想”とでも呼ぶべきテーマを見出すことができるようになる。しかし岡夫の願いとは裏腹に軍閥間の戦争は混迷を極め、奉天軍が北京に迫るとの情報が入った時点で、岡夫と高沐鴻は山西に戻ることになった。太原に戻った後、岡夫は同窓生の家に間借りして教育庁の職を得ようとしたが意に適う地位を得ることはできず、官界での出世に見切りをつけ、創作とイデオロギーの世界に傾倒することになる[24]。

2.3.2　北方左聯へ

1932 年秋、再び北京に戻った岡夫は、段復生の紹介で北方左聯[25] に加入し、沙灘左聯小組に配属された。小組では毎週例会が開催され、左聯本部から派遣された指導員が時事問題を解説・分析し、岡夫たちに任務を手配していた。彼

らの主たる任務は、夜間に街に出てチョークで“国民党を打倒せよ”，“共産党を擁護せよ”といったスローガンを書くことや、抗日宣伝活動やデモ行進といった集団活動に参加することであり[26]、その時の事績を岡夫は詩の形で残している；

「粉笔标语」-纪事杂句之一-

晚饭后，
粉笔标语，
经常的工作，
无穷的意味。

昨日的，
已警察揩去；
今日的，
正好动手现做。

暗夜罩在当头，
冷风卷在身后，
胸内跃者红心，
天边闪着星宿。
便衣警，
街头巷口，
手电、手提灯、
明巡暗嗅。
风在夜中吼，
人同风竞走，
字迹跳跳腾腾，
腕臂飞飞舞舞。

「チョークのスローガン」—事実の記録その一

夕食後、
チョークでスローガンを書く、
いつもの仕事、
無限の意味。

昨日のは、
既に警察に拭い去られ、
今日のは、
今まさに書かれようとしている。

闇夜が目の前を覆い、
冷風が背後に渦巻く、
胸に赤心を躍らせ、
空には星が瞬く。
便衣の警官が、
街角に路地に、
懐中電灯に手提げランプを手にして、
あちこちを嗅ぎまわる。
風は夜に吠え、
人は風と競争し、
筆跡は踊り、
腕は飛ぶように舞う。

道を歩き、
手に息を吹きかけ、
真っ暗な場所で、
光の言葉を書く。
(1932 年冬)[27]

走着路，

呵着手，

在黑的地方，

写上光的言语。

副題に“事実の記録”とあるように、岡夫自身の革命運動の経験を基に書かれた叙事的な作品であり、小説のワンシーンのようなリアリズムも感じられる。従来の作品にも革命や社会をテーマにしたものは数多くあるが、「女妖之舞」や「我们是来了」のようにあくまで理念的，抽象的なものであり、本作において初めて岡夫は叙事的かつリアリスティックな作風に転じたと考えられる。なお、同時期に書かれた「一次示威遊行的残句」(1932 年 3 月）も同様の傾向を持つ。

しかしこの時、人生最大の危機が岡夫を襲う。この年の 12 月上旬に、広州暴動の記念活動を行うよう沙灘小組に通知が届いた。岡夫たちは 8 日の夜にスローガンを書いたビラを用意し、沙灘近辺でビラを撒き始めたが、便衣警察によって拘束されてしまう。公安部，憲兵偵察隊などで尋問を受けたが、“左聯”メンバーであることは白状せず、結果、ビラを証拠として共産嫌疑犯、刑期は半年、という判決を受け、1933 年春に北平軍人反省分院、通称草嵐子監獄に収監されることとなった。

2.4　獄中にて

岡夫が収監された草嵐子監獄は、1931 年 9 月、国民党政府が共産党員および革命派人士を収監するために北京市西城区の草嵐子胡同に設立した臨時留置所が前身となっており、1932 年 3 月に北平軍人反省分院と改称され、正規の法律に拠らず軍法に拠って政治犯の反省を促すことを目的とした監獄であった。有刺鉄線に囲まれた 3～4000 平米の敷地には、最大 100 名程度の政治犯が収監されており、軍法処長閻文海が院長を兼任していた[28]。

岡夫をはじめ、収監された人々は皆足かせをつけられて監房に入れられ、定期的に軍法処の人員の講義を聞かされた上で審査が行われ、釈放を餌に反共声明に署名することを迫られたが、岡夫は拒みつづけ、当初の刑期が終わっても出獄が許されなかった。この時薄一波，楊献珍といった革命青年もこの監獄に収監されており、党の地下組織を立ち上げ、闘争を展開していた。岡夫は獄中

での闘争が評価され、1933 年 9 月に中国共産党に入党している。

劣悪な状況下でも岡夫は詩歌を武器として抵抗を続け、敵の迫害を非難し、獄中から人民に呼びかける作品を生み出した；

「镣之歌」

喝你的血呀吃你的肉,当啷当。

对不起你呀,当啷当。

不吃喝你,我就没得过,当啷当。

咱们哥儿俩好呀,当啷当。

你不是我冤家我不是你仇,当啷当。

不是冤家又怎聚头?当啷当。

好心也难得把你帮,当啷当。

前世你烧了断头香,当啷当。

谁也用不着假惺惺,当啷当。

狭路相逢难容情,当啷当。

冷不了你心肝,热不了我肠,

当啷当。

打开天窗话说亮,当啷当。

「足かせの歌」(『獄中残篇』)

お前の血を飲み肉を喰う、ガランガラン。
申し訳ない、ガランガラン。
お前を食い物にしなければ、やっていけない、ガランガラン。
俺たち二人うまくやろうぜ、ガランガラン。

お前は俺の仇ではなく、俺はお前の敵でもない、ガランガラン。
敵でもないのでなぜ顔を合せるはめになったのか、ガランガラン。
善意はあってもお前を助けてやれない、ガランガラン。
前世にお前は断頭香（離れ離れの喩え）でも焚いたのか、ガランガラン。

誰でも嘘偽りはよろしくない、ガランガラン。
隘路で逢っても許しがたい、ガランガラン。
お前の心は冷ませず、我が肚は熱くならず、ガランガラン。
天窓を開けて高らかに話そう、ガランガラン。
(1933 年)[29]

これらの獄中詩篇はあるものは石版の上、あるものは紙片、またあるものは獄中党支部の地下刊行物『Red October』誌上に発表され、戦友たちが見たあと、敵に発覚しないように皆処分された。現在我々が目にすることができる獄中詩篇は上で紹介した「镣之歌」も含めて 7 篇、いずれも自由律の形式を採用しており、草嵐子監獄での理不尽な虐待、転向を進める卑劣なやり口、そうした圧力に頑として抵抗する岡夫たち自身の経験と憤りを描いた「一箇討厭的東西」(1933 年～34 年)、日本に奪われた東北地方に思いをはせ、獄中から人民に

抵抗を訴えた「望郷曲」(1935 年 9 月)，1935 年 12 月に北京で発生した大規模デモの様子を描いた「12 月的風」(1935 年 12 月)，獄中の同志を鼓舞する歌詞を「インターナショナル」のメロディに合わせて付した「露天歌」(1936 年）など、自身の闘争や伝聞に基づいた内容を叙事的，リアリスティックなタッチで描いた作品が多い。

4 年近い獄中生活に耐えた岡夫たちは、1936 年秋、党中央と北方局によって救い出され、自由を獲得した。だが監獄の外の世界では戦争の足音が近づいており、身を休める間もなく彼らは抗日運動に身を投ずることになる。

2.5　まとめ

ここで改めて 1920 年代から 36 年までの初期作品について考察してみたい；山西外国文言学校において西洋の学術・文化および文学の洗礼を受けた岡夫は、1924 年ごろから詩作を開始する。この時期の習作は“生命”，“愛情”，“創作”といった根源的かつ抽象的なテーマを叙情的に歌い上げたものが多くを占める。

1926 年に外国文言学校を卒業すると、高沐鴻，高長虹ら同世代の文学青年との交流を深め、文芸副刊『Sturm und Drang』を創刊し、同紙を中心に自身の作品を発表しはじめる。これらデビュー直後の作品には、上記のテーマに加えて、“社会への憤り”や“現状への不満”，“権力への批判”といったテーマが登場する。

1930 年、新天地を求め、北京に移った岡夫は革命思想に触れ、その作品もより戦闘的な“革命への夢想”を叙情的に詠ったものへと変化する。

1932 年、北方左聯に参加し革命運動に身を投じた岡夫の作風は大きな転換点を迎える。自身の革命運動の経験を叙事的かつリアリスティックに描くようになり、そうした作風は草嵐子監獄収監中の作品からも変わらず見出すことができる。

このように、理念から現実、叙情から叙事へと変化してきた岡夫の作風はこの後どのような変遷の跡をたどるのだろう？次章では抗日戦争期から内戦期にかけての岡夫の作品を追っていく。

3. 抗日戦争期，内戦期の岡夫（1937 年～49 年）

3.1　抵抗の歌

3.1.1　犠牲救国同盟会

1936 年 10 月、自由を取り戻した岡夫は太原に戻り、薄一波たちが閻錫山と交渉して成立させた抗日統一戦線組織である犠牲救国同盟会に参加した。彼は下部組織の教材編集室所属となり、軍政訓練班の教材作成や抗戦文芸に関する講義を行った。この時期の作品は訓練班向けに作られた「昇旗曲」(1936 年)，「降旗曲」(1936 年）や「晋綏抗戦曲」(1936 年 11 月）など救国の志を声高に詠ったものが多い[30]。

3.1.2　抗日戦争前期

1937 年 7 月、日本との戦争が勃発し、同年 11 月には省都太原が陥落した。中共山西省委は太原陥落直前に山西を晋察冀，晋綏，晋西南，晋東南の 4 地区に分けて各地区に幹部を分散避難させ、農村地域を拠点に抗日根拠地を建設する計画を立てた。岡夫は高沐鴻らともに晋東南地区武郷県に派遣され、故郷での組織工作及び宣伝工作に従事している[31]。

武郷での活動がひと段落した後、沁県の犠牲同盟会中心区に異動となる。当時地区の責任者であった薄一波の命を受けて王書良，高沐鴻らとともに宣伝及び文芸運動に従事することとなり、1938 年 10 月に月刊誌『文化哨』を立ち上げた。翌 39 年には『文化哨』のスタッフを基盤に地区の文化教育界の代表を招集した文代大会が開催され、この大会の結果を受けて晋東南文化教育界救国総会が成立し、高沐鴻、岡夫らは総会の理事に選ばれる[32]。

この時期の岡夫の作品からは、自身の工作体験や、当時の晋東南地区における『文化哨』,『新華日報華北版』を発信源とした通俗性を重視した文芸活動の影響を見いだすことができる。

「我喊叫」
祖国!让我喊出
你的愤怒吧!
喊出你的
深重的苦痛!
你的
风信旗似地飘扬的

「私は叫ぶ」(節録)
祖国よ！私にあなたの怒りを
叫ばせてくれ！
あなたの深い苦痛を
叫ばせてくれ！
あなたの
風見のようにはためく
戦闘の光を！

战斗的光辉!
喊出啊,
向全世界!

我毫不羞惭,
我的粗糙的
无训练的喉咙:
因为你,
在光辉地战斗着,
而我,
是你的光辉的子孙!

在全世界面前,
(啊,全世界!)
你高高地仰着
那不屈的头颅!
像那浩浩平沙中的“司芬克斯”一样,

叫ぼう、
全世界に向けて！

私は少しも恥じない、
私の荒削りな
　訓練を受けていない喉を：
なぜならあなたは
輝かしく戦っており、
私は
あなたの輝かしい子孫だから！

全世界の目の前で、
（ああ、全世界よ！）
あなたは高々と
屈することなき頭を挙げる！
あの広大な砂漠の“スフィンクス”
のように、（1938 年）[33]

このように抗日戦争初期の作品は、上に引用した「我喊叫」（1938 年武郷）のように自身の侵略者への激しい怒りと祖国への愛を吐露したものや、「合理負担」（1937 年 8 月 12 日），「送到前線去」（1939 年春）のように抗日戦争への協力を訴えたものが多い。

これが 1939 年に入ると、自身の従軍体験を詩人の感情を交えつつ詠った「七月」（1939 年）を皮切りに、抗日戦争における悲喜劇を物語った叙事性の強い作品が続々と発表されるようになる；

「河边草」－山西长子县故事
河边草,青又青,
婆媳两个来逃生,
伶仃孤苦无依靠,

「川辺の草」―山西長子県の故事
川辺の草は青く、
母と嫁ふたり命からがら逃げだす、
孤独で頼るものもなく、
一匹のやせ馬が頼みの綱。

一匹瘦马是亲人。

人也乏,马也困,
青草河边歇一程;
人贪瞌睡马贪草,
不防来了个鬼子兵。

马嘶叫,人警醒,
鬼子已在笑狞狞:
“中国姑娘们大大的好!”
动手把媳妇拉近身。

媳妇挣,婆婆惊,
婆婆猛然计生心:
马缰拴住鬼子的腿－

鬼子当时已发了昏。

柳树枝,大拐棍,
婆婆使出平生的劲,
没命地抽打心爱的马,
马儿受惊没命地奔·

马儿奔,马儿奔,
鬼子的血尸拌灰尘;
婆媳两个喜得哭,
河岸儿上草青青。

人は疲れ、馬もへばり、
青草生える川辺で一休み；
人は眠りこけ馬は草を食む、
そこへ鬼子兵がやってきた。

馬は嘶き、人は驚き目覚める、
鬼子は既に獰猛に笑い：
“中国娘は大いに良い！”
嫁を近くに引っ張り寄せる。

嫁は抗い、母は驚く、
母は突然一計を案じ：
手綱を鬼子の足に縛る―

鬼子はその時のぼせ上がっていた。

柳の枝に長い杖、
母は懸命に力を振り絞り、
必死に愛する馬をひっぱたく、
馬は愕き必死に駆ける・・・・・

馬は駆け、馬は駆け、
鬼子の見まみれの死体は土埃にまみれ；
母嫁二人はうれし泣き、
川辺の草は青々と茂る。
(1939 年 9 月 10 日)[34]

このように民謡を思わせるリズムに乗せて日本兵の暴虐とそこから機知を以って切り抜けた母娘の物語を詠っており、大衆化を強く意図した作品である

ことが窺える。なお本作は『抗戦日報』に掲載され、広く解放区全体で詠われたという[35]。

続く「苹果树」－山西黎城県故事（1939 年），「皇軍到来的時候」(1939 年）も同様の傾向を持っており、こうした【他者の物語を時系列に沿って物語るように詠う】スタイルの作品は 40 年代に入っても数多く登場する。

3.1.3 抗日戦争後期

1940 年春、岡夫は武郷下北漳村に設立された晋東南魯迅芸術学校に転属となり、校内誌『魯芸校刊』の編集担当となる。当時は太行文聯（晋東南文化教育界抗日救国総会から改称）や政府機関も近隣に駐屯しており、朱徳や彭徳懐といった上層部も魯芸に定期的に講義に訪れていたという[36]。

1941 年に入ると戦況が比較的安定し、5 月には太行文聯と文協が共同で『華北文芸』を創刊するなど、文化方面での活動が活発化する。また、5 月 4 日に太行文聯，文協，晋東南魯迅芸術学校，抗大，『新華日報』社などの代表 1000 人余りを招集して開催された『華北文芸』創刊記念集会において、彭徳懐は；新文化運動の基本方針及び任務は民主的で・大衆化された・科学的な・真理を擁護する・民族の独立と解放への信頼を向上させるような文化を提唱すべきであり、マルクスレーニン主義を提唱し、批判的に中国固有の文化と外来文化を継承発展するべきである、という趣旨の講演をしており、この頃から党上層部の文化・文芸方面への要求がより具体的かつ現実に関与することを求めたものへと変化していることが窺える[37]。

さらに翌 1942 年 1 月、129 師団政治部と晋冀豫辺区党委が開催した文化人座談会には 20 以上の文化団体の代表，総司令部，各県，新華日報社，晋東南魯迅芸術学校など各機関の代表 400 名が参加し、前後 4 日間にわたって議論が繰り広げられた。初日に師団政治部の萁小平からの文化界への 4 つの要望；文化工作と政治任務の連携の強化，文化工作の批判性の発揮，セクト主義の否定と新旧知識人の動員，群衆生活の理解と作品の大衆化，が提出され、これに応じる形で 2 日目には通俗的な文芸形式の活用を訴えた趙樹理の発言が登場し、賛否両論を含む激しい議論が戦わされた[38]。この座談会での議論は『新華日報・華北版』，『華北文芸』誌上でも継続され、同年 5 月延安において発表された『文芸講話』の登場を予感させる内容となっている。

42 年末には『文芸講話』の内容が解放区にも伝えられ、44 年 5 月から 1 年間、文聯，新聞社などが合同で整風運動を実施した。この整風運動では『講話』

を含む 22 種の文献が学習され、これによって【政治＞文芸】の関係性や工農兵を対象とした作品作りといった方針が文芸工作者の間に定着したと考えられる。

このように、文芸の評価が政治任務への貢献度によって測られる方向へ変化しつつあった 40 年代前半において、岡夫が発表した作品は概ね 3 つに分類することができる：

まずこの時期には戦闘の激化に伴い「吊董天知同志」(1940 年・七言詩)，「五月的悼念」(1942 年)，「悼念太行文聯陳黙君、劉稚霊、蔣弼、高咏、張秀中諸同志」(1945 年・七言詩）といった抗日戦争の犠牲者を悼む作品が登場するようになる。こうした追悼をテーマとする作品には定型詩のスタイルが採用されることが多い；

「吊董天知同志」
百团大战欢腾日，
万人挥泪哭天知。
征衣鲜血斑斑在，
想见英豪杀敌时。

「董天知同志を悼む」
百団大戦勝利に沸き立った日、
万人が涙して董天知を悼んだ。
軍服の鮮血はまだらに、
英雄が敵を倒した時を見たく思う。
(1940 年)[39]

また抗日戦争初期から継続して「綿花」(1940 年)，「五月勝利曲」(1940 年)，「献歌」(1940 年)，「曼陀林曲」(1941 年 6 月)，「太行聯中卒業歌」(1942 年 10 月)，「打走敵人変活城」(1945 年)，「漳河吟」(1945 年）といった抗日および革命工作の推進をテーマとしたものも数多く創作されている。これらの作品は“～曲”，“～歌”という題名からも明らかなように、曲に合わせて詠う歌詞としての使用を想定したものが多い。

そして、「好像他完全忘记了呀－山西武乡县下北漳故事」(1940 年 5 月)，「小司号員和他的号」(1941 年 12 月)，「十一个」(1942 年 4 月)，「路之歌」(1943 年 1 月)，「小孩和羊」(1944 年 4 月）といった【他者の物語を時系列に沿って物語るように詠う】タイプの作品も 30 年代末に続き数多く創作された。40 年代のこうした叙事的な作品の特徴として、長編化・小説的なディテールを挙げることができる。「小司号員和他的号」(「少年ラッパ手とラッパ」）を具体例として見ていこう。本作は 3 章構成となっており、第 1 章では孤児の少年が憧れの八路軍に入隊し、周囲の援助と本人の熱意によって立派な少年隊員に成長していく様子が描かれる；

「小司号员和他的号」
同志们!朗诵者有一个要求:
不管他念得好与坏,
请不要照例地拍手!
「一」
小司号员,
鼓着红红的腮帮
吹号。
哈,
他吹的号,
哪个人不说好!

在他的号音里边,
有着少年人
美妙的成长和希望:
八路军,这光荣的名称,
深深地,深深地,
刻在他嫩的心上!
他原是一个孤儿。
自幼儿
吃过好多苦:

他放过羊,
讨过饭,
受过地主爷们的欺侮。

那一年大热天,
打退抢麦子的敌人,

「少年ラッパ手とラッパ」(抜粋)
同志たちよ！朗詠する人からお願いがある：
読み方が上手かろうが下手だろうが、
いつものように拍手はしないでほしい！
「一」
少年ラッパ手は、
真っ赤なほっぺを膨らませ
ラッパを吹く。
ハッ、
彼が吹いたラッパは
皆が上手いと言う！

彼のラッパの音には、
少年の
美しい成長と希望が込められている；
八路軍、この栄光の名は、
深々と、深々と、
彼の柔らかい心に刻み込まれている！
彼はもと孤児。
幼いころから
辛酸をなめてきた：

彼は羊飼いをし、
物乞いをし、
地主の旦那たちに苛められてきた。

あの年の暑い日、
麦を奪いに来た敵を退け、
八路軍が彼の村にやってきた；
彼はすぐさま頼みに行った
—“八路軍”に参加したいと：
早くからその威光と名声を耳にしていた[40]。

八路军开到他庄上;
他马上去要求
一参加"八路":
他早就听说过它的威望。

続く第2章では、入隊して2年、ラッパ手になった少年の職務への誇りと未来の夢が詠われる；

他把号筒擦得透亮,
金光一闪一闪,
一个大红丝穗子,
吊在号的一端。

他鼓着全身的力气,
号音吹得又雄壮,又婉转;
他漆黑的眼睛冒出火花,
配着他红红的小脸。

他觉得他有大的力量,
有大的责任:
连队的驻营宿营,行军打仗,
都在听他的号令。

天亮他把同志们吹起身,
天黑了,吹他们到床上,
听他的号音大家开会,
听他的号音上讲堂、上饭堂。

听着他滴滴答答的号音,
风天雨天半夜里，也打起背包

彼はラッパをピカピカに磨き上げ、
光がキラキラ反射する、
真っ赤な房を、
ラッパの端にくくりつける。

彼は全身の力をこめて、
勇壮に、また滑らかにラッパを吹く、
彼の漆黒の瞳からは火花が飛び出し、
彼の紅い小さな顔立ちに調和する。

彼には大きな力があり、
また大きな責任がある：
中隊の宿営、行軍、戦闘は
皆彼の号令を聞くからだ。

夜が明けると彼は同志たちを起こし、
日が暮れると彼らを床に就かせる、
彼のラッパの音を聞いてみな会議を始め、
号令を聞いて講堂に入り、食堂に向かう。

彼の号令を耳にすれば、
風の日も雨の日も真夜中でも、背嚢を背負って出発する、一日腹をすかせ、食事が口元までやってきても、号令を聞けば、熱々のお椀を下におろす。

出发;
饿了一天,饭刚凑到嘴边,
听号音,忙把热热的饭碗放下。

他常亲眼看见:在好多次战斗
中,同志们躬着身,屏着气,
跳过梯田,跳过山梁,
冲进敌人的阵地;

彼はいつも自分の目で見てきた：幾度もの戦闘の中、同志たちが身をかがめ、息を殺し、棚田を飛び越え、山の背を飛び越えて敵陣に突撃するのを[41]；

そして第3章では、敵に捕らわれたラッパ手が、八路軍の同志をおびき寄せるため、集合ラッパを吹くよう脅迫されても頑として拒絶し、敵兵を道連れに自らを犠牲にして味方を守った姿が描かれる；

“胡子”一手拿着号,
一手拿着枪,
枪指着少年的胸膛,
他说:”看你吹,看你不吹!”
看呀－
少年霍一下把号夺在手!
他发出那样的怒吼:
“我不吹!我不吹!
我是一个中国人!
我是一个八路军!
我不能够听－敌人的命令!
我会吹!我会吹!
我就是－不吹!”
像鹰鹞一般飞快－
少年举起号,
劈向“胡子”的脑袋!

ヒゲ”は片手にラッパ、
　もう一方の手でピストルを持つ、
銃口は少年の胸元を指しながら言った、
“吹け！”
見ろ—
少年はいきなりラッパを奪い取った！
彼は吼える：
“僕は吹かない！吹かない！
僕は中国人だ！
僕は八路軍だ！
僕は敵の命令は聞かない！
僕は吹ける！吹けるんだ！
吹かないだけだ！”
鷲のように素早く—
ラッパを振り上げ、
“ヒゲ”の頭に打ちつけた！
強く、
激しく—
“ヒゲ”の頭蓋骨は

那样猛, *那样狠ー* *“胡子”的天灵盖,* *霎时削去了半块!* *・・・・・* *就在当天的中午,* *我们反击退敌人,* *我们的连队,* *回到了原驻地;* *同志们收殓着烈士们的尸体,* *流着烫滚滚的眼泪・・・・・* *我们的小司号员同志,* *中了三枪,* *一颗子弹穿透胸口,* *两颗射出脑浆・・・・・* *同志们给他洗着,包着,* *把他装进一口小小的棺材里;* *他那只心爱的被踏扁了的号,* *擦亮亮的,* *留在纪念堂ー* *还吊着那个大红丝穗子!*	瞬く間に半分になった！ ・・・・・・・・・ その日の正午に、 　我々は反撃して敵を退けた、 我が中隊は、 　駐屯地に戻ってきた； 同志たちは烈士たちの遺体を棺に納める、 熱い涙を流しながら・・・・・ 我らの少年ラッパ手同志は、 三発被弾しており、 一発は胸部を貫通し、 二発は脳漿を飛び散らせていた・・・・・ 同志たちは彼を清め、包み、 小さな棺の中に納めてやった； ぺちゃんこにされた彼が心から愛したラッパは、 　きれいに磨かれて 　記念堂に留められた— 　あの真っ赤な房を付けたまま！[42]

このように少年ラッパ手の勇気と悲劇的な死のシーンがリアリスティックに描かれている。本作は岡夫が病を得て入院していたときに耳にした話を基に創作したものであると彼は回想しており[43]、こうした伝聞や岡夫が当時編集を担当していた雑誌・新聞に寄せられていた通訊がこの時期の創作の源泉となっていたことを窺わせる。

3.2　国共内戦期

抗日戦争末期、岡夫をはじめ太行文聯のメンバーは 129 師団とともに前線に赴き、遼県・陵川奪還作戦に加わった。軍事活動が落ち着くと文化界は恢復に

力を注ぐようになり、1945 年に趙樹理，王春と華北新華書店のスタッフは『新大衆』報を創刊し、後の大衆文芸振興の礎を築いた。また、翌 1946 年に高沐鴻，岡夫ら太行文聯のメンバーも大型文芸専門誌『文芸雑誌』を刊行し、長編かつ良質な作品の掲載と新人の発掘に努めるなど、山西の文芸は戦況よりも一足早く復興の時を迎えようとしていた[44]。

岡夫のこの時期の作品は、46 年から 47 年に数多く発表されており、「向海城将士挙杯」(1946 年 6 月)，「起義」(1946 年 9 月)，「青年党 “裸体遊行”」(1946 年）といった敵対勢力への批判や投降の呼びかけというメッセージ性の強いものや、「賀朱総司令六十大寿」(1946 年 12 月）のような共産党や指導者への賛美を詠ったものが登場している。また、抗日戦争期に続いて物語性の強い作品も数多く生み出されており、「申秋子講翻身」(1946 年)，「人民大翻身頌」(1946 年)，「黄姥人紡花」(1947 年 3 月 15 日)，「申海珠」(1947 年)，「故城翻身謡」(1947 年）など、抗日戦争の勝利から土地改革および減租減息を経て齎された貧困層の “翻身”(生まれ変わり）を題材としたものが多くを占める。

ここで岡夫の代表作のひとつに数えられる「申海珠」(1947 年）に注目してみよう、本作は太行区群英会で参軍英雄となった申海珠を主人公とした叙事詩であり、晋冀魯豫辺区政府教育庁主催の第一回文教作品賞の詩歌部門で甲等賞を受賞するなど、当時の解放区文学の詩歌を代表する作品と言える；

「申海珠」
沙河申海珠，
二十年老煤窑工，
太行群英会上，
他被选为参战英雄。
开会的日子他跳到台上，
撑手舞脚大骂道:“蒋介石，
你什么东西赶来进攻八路军!
八路军是我的生身母、养身父，
我能走能坐能说话，全靠八路军，八路军，救过我全家的命；
你今天要来制死我，

「申海珠」(抜粋)
沙河（河北省）の申海珠は、
20 年間炭鉱労働者をやり、
太行区群英会で、
参戦英雄に選ばれた。
開会の日彼は舞台の上に飛び上がり、
身振り手振りを交えて罵る：“蒋介石よ、
お前はよくもまあ八路軍を攻めてきたものだ！
八路軍は俺の生みの母で育ての父だ、
俺が今歩き座り話せるのも、みな八路軍のおかげ、
彼らは俺の一家の命を救ってくれた；
お前が今我らを制圧しようというなら、

我申海珠和你拼到底, *我活一天,和你蒋介石拼一天命!"* *讲话时,他脸上暴着一股一股红筋,* *几百位英雄和干部,* *无一人听了他的话不感动。* *水有源,* *树有根,* *海珠对于八路军,* *从前本是半疑不信,* *他那时说:"唉!军队哩,* *穿的烂鞋片,背的干粮袋,* *那还能成事儿!"*	俺申海珠がとことんまでやってやろう、 俺が生きた分、蒋介石とその命を賭けてやってやろう！" 話している間、彼の顔には青筋が浮かび、 数百人にもおよぶ英雄と幹部たちは、 皆彼の言葉に感動する。 河には水源があり、 樹木には根がある、 海珠も八路軍に対して、 嘗ては半信半疑であった、 当時の彼は言ったものだ："ふん、軍隊なんてものはボロ靴を履いて携帯食を背負うだけ、 あれで何ができるってんだ！"[45]

冒頭は主人公申海珠が参軍英雄に選ばれ、八路軍への感謝と蒋介石への憤りを表明する場面から始まり、その後彼の過去の物語に遡る；炭鉱労働者だった申海珠は当初八路軍をはじめ軍隊そのものに不信感をもっていた；

可是世道转变一来二的, *让海珠换了一颗心,* *海珠变成另外一个人。* *灾荒年,高德林起粮起款抓壮丁,* *逼得海珠在家不能存身,* *海珠只好逃荒去,* *几亩薄田一起卖干净,* *一条扁担八股绳,*	だが世間は次第に変わり、 海珠も心を入れ替え、 全く別の人間に生まれ変わった。 飢饉の年、高徳林は食料に金に労役を徴発し、 追いつめられた海珠は家に居られなくなった、 彼は飢饉を逃れて外地に出るしかなく、 幾畝かの荒れ地を売り払い、 天秤棒に縄八本、 片方に子供を下げ、もう片方に鍋釜を下げ

一头挑着小孩,一头挑些破锅盆, *老婆背条破被随后跟,* *沿路乞讨到了太原城,* *太原西山也揽不下工,* *一天吃半肚,两天干挨饿,* *后来听得熟人谈,* *八路军打了公司窑,* *又在附近放急赈,* *海珠又和老婆小孩,* *沿路乞讨回到村,* *小孩的脖子饿得绳儿细,* *上台阶,跌个后坐地,* *海珠想:"决死无疑!"* *不想新村长来慰问,* *送来二斗救济米,* *海珠一家人,就活了命。*	る、 妻はボロ布団を背に後ろにつく、 道中物乞いをしながら太原城に辿りついた、 だが太原でも仕事は見つからず、 一日食べても物足りず、二日は飢えに耐える日々、 後に知り合いから聞いたところでは、 八路軍が官倉を襲撃し、 村近くで救援物資を放出していると、 海珠は再び妻と子とともに、 道中物乞いをしながら村に戻った、 子供の首は飢えで縄のように細くなり、 階段に躓いて地べたに座り込む、 海珠は思う："決してもう疑うまい！" なんと新村長が慰問にやってきて、 二斗もの救済米を持ってきてくれた、 海珠一家はこれで命をつないだ[46]。

国民党軍敗残兵の首領高徳林の圧制に耐えかねた申海珠は物乞いになり、日々の食事にも事欠くようになる。そこへ八路軍の救済米が届き、一家の命が救われた。八路軍に恩義を感じた申海珠は、恩返しのため戦場に担架部隊として参戦し、負傷者の回収に活躍する；

咱的军队冲上去, *敌人机枪咯咯咯乱扫射,* *伤了咱许多人。* *有两个重彩号,离炮台太近,* *这里干着急,没人往下拖,* *申海珠,申海珠,冒了火,*	わが軍が突撃しても、 敵の機銃がダダダとあたりを掃射し、 多くの味方を傷つけた。 二人の重傷者が、砲台のすぐ近くにいた、 みな慌てるが、連れ戻せる人もいない、 申海珠はかっとなり、 "俺が連れ戻してくる！

心想:“我去拖!
咱这来,就是为报恩,
把命交给毛主席,死了也光荣”
就对排长说:
“排长,我去拖”,
一边说,一边脱衣服,
脱得精光光,只留下一条紫花布小裤衩,
浑身上下,都和土一样颜色,
裤带上掖一条绳子,
爬下去,肚皮贴地皮,
两条胳膊做成腿,
一蠕一蠕往前移。
移到炮台根,
摸着彩号的腿,
解下绳子拴上去,
套在自己肩膀上,
掉转身,一蠕一蠕往回拖,
机枪子弹，日儿日儿头上飞,
拖了几十步,真是沉,
海珠慢慢钻到彩号身下去,
把彩号挪到脊背上,忽突一下站起,只听得彩号肚里咕噜一声响,
海珠,一口气跑回咱的阵地里。

俺たちは恩に報いるためにここに来た、
命は毛主席に預けてある、死んでも光栄だ。”
そして小隊長に：
“小隊長、俺が連れ戻してくる”
言いながら服を脱ぎ、
すっぽんぽんの短パン一枚、
全身上から下まで、土と同じ色になり、
ベルトに縄を挟みこんで、
這い下りていく、腹をべたりと地面につけ、
二本の腕を足のように使い、
じりじり前に進んだ。
砲台のすぐ下までたどり着き、
負傷者の脚を探りあてると、
縄をほどいて縛り付け、
自身の肩に背負い込んで
向きを変えて、じりじりと戻っていく、
機銃の弾がびゅんびゅん頭上を飛ぶ中、
数十歩も引きずるのは本当にきつい、
海珠はゆっくり負傷兵の下にもぐりこみ、
負傷兵を背骨の上に載せ、いきなり立ち上がった、
負傷者の腹がぐるぐる鳴るのが聞こえたが、
海珠は一気に我らが陣地に駆け戻ってきた[47]。

敵を倒し、沙河を解放した申海珠たちは、村を導いて変革し、皆を生まれ変わらせた。参軍英雄に選ばれた申海珠は、改めて八路軍への忠誠心と打倒蒋介

石の決意を表明して物語は終わる。

このように申海珠の【軍に対して不信感を持つ⇒八路軍に命を救われて改心する⇒戦場で活躍⇒参軍英雄となる】という物語が、時間軸に沿って民謡的なリズムと小説的な描写を用いて詠われている。こうした詩という形式を通じて物語を詠うスタイルは、岡夫の 30 年代から 40 年代の作品において多用されているが、この時期の作品にはひとつ注目すべき変化が存在する。この時期の物語性が強い作品；「申秋子講翻身」(1946 年)，「人民大翻身頌」(1946 年)，「黄姥人紡花」(1947 年 3 月 15 日)，「申海珠」(1947 年)，「故城翻身謡」(1947 年）において詠われる物語には、同時期の山薬蛋派のほかの作家の作品にも共通して見出せる特徴；解放区で発生した諸問題を積極分子あるいは共産党員の力によって解決する、という【問題⇒解決】の構造が存在しており、この構造が登場し始めた時期もほぼ一致している[48]。

内戦終結が近づいた 1948 年から 49 年にかけての時期、組織工作の増加のせいか岡夫の作品数は減少し、また「参軍小曲 10 首」(1948 年 12 月・七言)，「帰隊小曲」(1948 年 12 月・五言)，「做长工・七言」(1949 年元旦)、といった定型詩が多くを占めるようになる。

3.3 まとめ

ここで抗日戦争期および国共内戦期の岡夫の詩作について概括しておきたい。抗日戦争初期、『文化哨』および文総（のちの文聯）を拠点に岡夫は創作活動を続けており、「我喊叫」(1938 年）のように高らかに声を上げて抗日を呼びかける一方、「河辺草」(1939 年 9 月 10 日)，「皇軍到来的時候」(1939 年）のように解放区で発生した悲喜劇を直線的な時間軸で詠う物語性の強い作品も数多く生み出した。

40 年代前半には、文芸座談会の開催を通じて文芸に対する党の要求が強化・具体化される中、「綿花」(1940 年)，「五月勝利曲」(1940 年）のように抗日戦争や革命工作の現実を詠ったものや同志の死を悼む作品が登場するようになる。また「小司号員和他的号」(1941 年 12 月)，「路之歌」(1943 年）のように解放区で発生した物語を直線的な時間軸で詠う叙事的な作品も、より長編化・小説的なディテールが加わった形で作り続けられた。

国共内戦期に入っても、物語性の強い作品が数多く生み出されるが、詠われる物語は解放区人民の“翻身”(生まれ変わり）をテーマとしたものが中心となり、他の山薬蛋派の作家の作品と同様、物語の中に【解放区で発生した諸問題

を積極分子あるいは共産党員の力によって解決する】という【問題⇒解決】構造が登場するようになる。

ここで一旦20年代の初期作品も視野に入れて変遷の迹を辿ってみよう；“愛”・“生命”・“創作”と言ったテーマを叙情的，ロマンティックに描く詩風からスタートした岡夫は、次第に社会現象へと目を向けるようになり、革命運動に身を投じた30年代初めには自身の経験を叙事的・リアリスティックなタッチで詠い始める。抗日戦争期・国共内戦期には自身の物語ではなく、自身が見聞した解放区で暮らし闘う群衆の物語を詠うようになり、詠う物語も【問題⇒解決】構造を有するものへと変わっていく。

こうした叙情から叙事、ロマンティックからリアリスティックといった変化の軌跡は、他の山薬蛋派の作家たちが同じ時期に辿ってきた変化の軌跡；描写優位から叙述優位、1人称の物語から3人称の物語、と非常によく似ているように思われる。

では中華人民共和国建国後、岡夫の詩作はどのような変化の迹を辿り、そしてそれは他の山薬蛋派の作家たちとどのような相似あるいは相違点を持つのであろうか、引き続き論じたいところだがあまりに冗長に過ぎてしまった、この問題については稿を改めて考察していくことにしたい。

「岡夫詩における叙事性」(下)
第4章：建国後17年間の岡夫
第5章：文革期から晩年
第6章：おわりに

1　本稿において使用する中国語の簡体字，繁体字は、引用部分を除いてできる限り日本語の新字体で表記することとする。

2　「作家簡歴」(『岡夫文集』(以下『文集』）山西人民出版社2001年7月)，「岡夫」(『山西作家群評伝』崔洪勛編　作家出版社1990年）などを参考にした。

3　『山西文学』1983年第2期

4　『山西文史資料』1998年8月

5　三晋出版社　2011年

[6] 『多維和与雅俗之間－趙樹理与「山薬蛋派」新論』(席揚　中国社会科学出版社 2004 年)，『中国解放区文学思潮流派論』(蘇春生　中国社会科学出版社　2000 年)

[7] 拙稿「趙樹理文学における故事性」(『島大言語文化』13 号 2002 年)，「趙樹理文学の変容」(『島大言語文化』15 号 2003 年)，「馬烽文学における語り」(『島大言語文化』20 号 2006 年)，「西戎文学における物語構造」(『島大言語文化』24 号 2008 年)，「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26 号 2009 年 3 月)，「孫謙文学における語り」(『島大言語文化』30 号 2011 年 3 月)，「束為文学における物語性」(『島大言語文化』31 号 2011 年 10 月）を参照されたい。

[8] 「从先父剪辫子说起」(『文集』3 巻 p 1285）1991 年

[9] 趙戴文（1867–1943)、山西五台の人、1905 年に日本に留学し、辛亥革命後は閻錫山の腹心として山西省都督府秘書長を務めた。

[10] 中国名衛西琴、ドイツ人銀行家を父に持つ。音楽，文学，哲学の博士号を持ち、早くから中国文化に高い関心を寄せ、民国初期に中国にやってきた。「梁漱溟唯一的外国朋友—衛西琴」(智効民『博覧群書』2001 年 7 号)，「衛西琴与山西外国文言学校」(呉明焯『縦横』2002 年 11 期)

[11] 「山西外国文言学校回憶片段」(『文集』3 巻 p 1300）1992 年，「往事雑憶」(『文集』3 巻 p 1311）1996 年

[12] 「往事雑憶」(『文集』3 巻 p 1311）1996 年

[13] 『文集』1 巻 p 8

[14] 同上 p 12

[15] 同上 p 18

[16] 『晋陽日報』の副刊として毎週 1 期、約 1 年間発行した。

[17] 『文集』1 巻 p 21

[18] 同上 p 28

[19] 同上 p 22、23

[20] 同上 p 31

[21] ロシアの革命家、ソ連初代の教育大臣。芸術評論を中心とした文筆活動でも知られる。魯迅は彼の著作を翻訳しており、岡夫が目にしたのも魯迅訳であろう。

[22] 『文集』1 巻 p 60、61

[23] 同上 p 65、66

[24] 「往事雑憶」(『文集』3 巻 p 1331）1996 年

[25] 中国左翼作家連盟は 1930 年 3 月に魯迅をはじめとする革命文学系の文学者が結成した組織であり、文芸大衆化運動などを提唱した。

[26] 「我在“北方左聯”始末」(『文集』3 巻 p 1336）1989 年

[27] 『文集』1 巻 p 74、75

[28] 『在草嵐子監獄里』(劉昭　中国文史出版社 1987 年）p 49

[29] 『文集』1 巻 p 77

[30] 「抗戦輝煌了太原－親歴見聞片段側記」(『文集』3 巻 p 1347）1995 年

[31] 「整頓恢復武郷党組織簡憶」(『文集』3 巻 p 1352）1985 年

[32] 「太行文聯回億鱗爪」(『文集』3 巻 p 1358）1982 年

[33] 『文集』1 巻 P 112

[34] 同上 P 126

[35] 「芹献一束－平凡的詩歌与不平凡的年代」(『文集』3 巻 p 1695）1986 年

[36] 「峥嶸歳月憶“魯芸”」(『文集』3 巻）1987 年

[37] 「太行文聯回億鱗爪」(『文集』3 巻 p 1365）1982 年

[38] 同上 p 1368

[39] 『文集』1 巻 p 160。＊董天知は河南省出身の共産党員、北京草嵐子監獄に収監され、1936 年出獄後に太原にやってきて犠牲救国同盟会の仕事に従事した。山西新軍決死隊が成立してからは、第 3 縦隊政治部主任となった。1940 年、戦闘中に死亡（本作の注釈より）。

[40] 同上 p 163

[41] 同上 p 168

[42] 同上 p 174

[43] 「芹献一束－平凡的詩歌与不平凡的年代」(『文集』3 巻 p 1699）1986 年

[44] 「太行文聯回億鱗爪」『文集』3 巻 p 1371　1982 年

[45] 『文集』1 巻 p 262

[46] 同上 p 264

[47] 同上 p 272

[48] 拙稿「趙樹理文学における故事性」(『島大言語文化』13 号 2002 年)，「趙樹理文学の変容」(『島大言語文化』15 号 2003 年)，「馬烽文学における語り」(『島大言語文化』20 号 2006 年)，「西戎文学における物語構造」(『島大言語文化』24 号 2008 年)，「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26 号 2009 年 3 月)，「孫謙文学における語り」(『島大言語文化』30 号 2011 年 3 月)，「束為文学における物語性」(『島大言語文化』31 号 2011 年 10 月）を参照されたい。